「天然丘陵の斜面を其儘庭園築造舞台として自然型の林泉を築造し、之に雪舟仮山の伝を加えた事で、殊に現存型に於いて田川郡中元寺字猿渡の火ノ口氏邸古苑と、その相貌極似する点、特殊的興味を深く誘うものがある」と記されている。火ノ口氏邸庭の主な樹木は桜、百日紅、マキ、ツバキ、シイ、カシ、イヌツゲ、サザンカ、ナンテン、シャクナゲ、モモ、モクセイ等でその他にツツジを多く用いている。雪舟庭には松の全くない処が多く、楓の植え込まれた庭が多い。

村上氏庭園築造には郡誌にも一寸出ている如く、此の地の風景と相調和する様意図されていると云われるが、詳細は主人も知らぬ由である。例えば池の水面に美しい平尾台の山容を浮べるよう意が払われたり、遠く南の竜ケ鼻から西方に連なる山々等との相関、又この西の山の端に沈む夕陽との意義づけを知る事が出来れば、庭を観賞する者をして更に強い造形美を味陶させるであろう。このことに造詣深き荒尾市在住の古老某氏のお話の投稿に遇れたことを心残りとする。

昭和七年この庭の実査に当つた永見建一氏は友人飯田氏が長府図書館員に聞いた報を特記しているが、それは所謂北九州に承伝する雪舟仮山の〝雪舟に関して「画聖の雪舟」とは全く別の「庭築雪舟」が実在し、その人物の築造遺構が長府にも二三残存していると。面白い話と思い敢えてここでも記した。

横代神楽の湯立

横代神楽

大隈岩雄

神楽は所謂神慮を慰める音楽舞踊なのだが現在では農山村における民間芸能の一つで村人たちのリクレェーションでもあるようだ。全国にある神楽の主なるものは、中国の佐陀神楽、備中神楽、石見神楽、関東の里神楽、東北の山伏神楽、番神楽等が有名であるらしいが、九州がなんといつても神楽の発祥地といつてもよいのではなかろうか。天孫降臨は南九州の日向神楽、岩戸神楽、佐伯神楽、それに北九州では平戸神楽、福岡の岩戸神楽などが代表と称されている。その系統を引くのか旧豊前には特に神楽が多い。彦山神楽、寒田神楽、求菩提神楽、山田神楽、今井神楽、稗田神楽、木山神楽等、小倉市内に現存する神楽講としては、合馬、横代、石田、吉田、蜷田、木下、富野、砂津、朽網、北方等がある。この内、今でも活発に舞つているのは、なんといつても横代神楽が代表であろう。次が合馬、石田、砂津、蜷田等で他は数年に一回、よほどの祭行事でないと行われていない。

横代神楽の起源は古文書が失われているので詳しくは判らない。伝説によると二通りある。その一つは細川公の時代、悪疫が流行したのでそのお祓いの神願をかけたところ忽ち村中が治つた。当時の神社は今の高倉八幡で以来「万年願」として奉納するようになつ

た……と伝えられている。それが慶応二年の御変動以来、中止の形になつていたのを、明治十二年頃、当時東谷に移り住んできた某氏が築上郡赤旗神楽の名手であつたので、この人を招いて手ほどきを受けたのが始まりともいわれている。当時、同じように合馬神楽もこの某氏から習つていることが判つた。以来、横代神楽はその維持のため「講」をつくり好きな同人が各自、費用を持ちより、或は地方の祭りに出演してその謝礼を衣装の補修費や面具の購入に充てて受継いで今日に至つている。舞人、ここでは舞子（まいこ）といつている。この舞子の補充には近年弱つているらしい。純農村であつたが、二男、三男はそれぞれ勤務先が出来て、稽古に差支えるようになるし、青年の内には、馬鹿馬鹿しくて出演する気になれないなどといつている者もでるし、現在、拾五名余りの維持がやつとらしい。それでも世話人の前田さん、石丸さんの熱意は強く、これを後援する宮司の白石義人さんの力も又大いにあずかつているようである。

横代神楽の奉納日は毎年十月八日の夜中に始まる。当日が高倉八幡宮の大祭日であるが、神事は宮関係者、氏子総代が集り　簡単なもの、村中は自宅に近親縁者や知人又は嫁に行つた娘、他出している息子達を迎えての「喰べ祭り」で甘酒、まんじゅ、すし、おこわ、その外山の幸、海の幸を山盛り、日暮れから飲めや唄えの騒ぎとなるほどである。午後十一時頃になると上、下横代の老幼男女が重箱や酒を片手に「今晩は今晩は」とお宮に集つてくる。約百名近くの人々は拝殿の左右に思い思いに座をしめ、わいわいがやがやと賑やかなもの、晴着を着かざつた娘さんたちは拝殿の外に立つて決して中に座ろうとしない。晴着が汚れるからであろう。午前零時頃白石宮司が一杯気嫌で衣冠束帯、それでもしやんと畏り祝詞奏上、神事が終ると、直ちに神楽が始る。本殿横が支度部屋、渡り廊下を白衣、黄衣、緑衣、紅色の衣装も美しく、笛、手拍子、太鼓も賑やかにひらりひらりと舞う姿は周りの常暗とかがり火にとけこんで、文字通り神人共に楽しんでいるようになるから不思議だ。見物人は老父達の盃のやりとり、半畳、声援、その内、曲目の間を利用して、「はな」の御礼という披露がある。「誰、何某様より神楽講へ下さる、厚く花の御礼まで……」と前田さんがやると、わつと手拍子がはしやぐ、御祓い、米撒き（こめまき）折井（おりい）、御福（みふく）、手草（たぐさ）、地割（じわり）、五行（ごげう）剣舞い（つるぎのまい）、御先駆（みさき）、岩戸開き（いわとびらき）、湯立て（ゆたて）、木登り（きのぼり）等、大体一舞い十分から二十分はかかる。見所は岩戸開きで、手力男命、うづめの命ではなやかなもの、見物人一同やんやとほめそやすが、中でも鬼の役になつた（五鬼）四人の者を見物の中から同年輩位の若者が飛出し、舞子を一人一人肩にかつぎ拝殿から飛降り五十段余りの石段をはるか下の畔道まで捨てに行く等、余興の方が面白い。湯立行事は横代神楽の専門らしく十二把の薪を燃やした平家の高歩きでその熱湯を見物人に撒き散らしたり、火渡り行事をする。終ると木登りで高さ二十米位の杉丸太に三方からロープを張り固定したものを神主に扮した舞子がたすき十字、股立とつた姿で木登りすると、それを追うかのように鬼面を冠つた舞子が登つたり降つたり追いつ追われつ、これが済む頃には暁闇の明りがうすぼんやり始め霧ケ岳の辺りが少しずつ明るくなり、夜明けの明星がまたたき始め、見物人ははつと我にかえつたかのように三三、五五と家路に帰りはじめる。称して「横代の夜神楽」という。

横代神楽講（昭和二十七年調べ）

太鼓	前田利次	五十八才	農業
手拍子	石丸弥住	五十一才	会社員
笛	白石環	三十八才	鉄道員
舞子	白石均	二十七才	市吏員
同	平野光義	二十七才	農業
同	仙石貢	二十五才	会社員
同	石丸保広	二十一才	農業
同	水上義雄	二十一才	会社員
同	前田登	二十一才	農業
同	三村茂	二十二才	農会
同	前田孝司	二十三才	農業
同	白石武	十八才	農業

高倉八幡宮々司　白石義人氏

尚、神楽系統は、築上郡赤旗八幡の赤旗神楽ではなかろうかと思われる。反対に小倉市内では富野神楽だけが「白旗神楽」らしい。後日、小倉市内に現存する神楽の系列、分布等を詳しく調べて報告するつもりである。

女夫膳

思出のたべもの

安広氷人

僕の小学生の頃の事（日露戦争前後にわたる）巷の子供達の小使五厘、一銭。一厘銭が通用してる頃の事。お寺参りの年寄の賽銭を寺で一厘と交換して呉れるので老人にせがめば、一厘銭を五枚は呉れることを子供達は心得ていた。菓子の単位は五厘が対象で売られていた。

主として黒糖を材料に桂皮末を混入したものこれを「ニッケガシ」と呼んで居た。千金丹と云ふのは懐中薬の千金丹に模したもの、らつきよの形のらんきよがし、指の丸さ位の一厘玉、一銭で十二、三個位呉れた。白糖の菓子は筆形の筆がし軸が紅色穂先が白、団扇の様に竹を割つて拡げてその先に丸い玉をつけたかんざし、麦ようじを芯にしたゴマ（コマ）豆板、落花生入り粟おこし、せんべい、りんかけ豆、京町三丁目の矢野の一六饅頭、夏の葛饅頭の類。

その頃、京町四丁目（現在の湖月堂の処）に神戸から来た山下と云ふ店が、外国船など相手にウヰスキー、ブランデー、外国煙草、チョコレート、コンデンスミルク等々を商つていた。僕と同級生の伴が主人公。母親の気のつかない様に裏の土蔵にこつそり入つて、うす暗い二階に上り手探りで重いとびらを押して、チョコレートの缶を開いて銀の包紙をそつと破ると、何ともいひ様のない、舶来の香りが子供の僕の神経を夢の国へと誘つた。二人は次々と銀の包紙を破いては幾つも食べ

て夜になつたのを知らずに蔵を閉られた事があつた。その頃ビスケットも初めて食べた。日本人はまだそんなものを口にした事はなかつたであろふ。森鷗外で有名になつた三樹亭（三樹政吉経営）も三軒隣りの角で、洋食もその頃父がパンだつたのでスープやミンチボール、ハンバグステーキ、コーヒー等父のおかげで味を覚えて料理場へも足を入れて、時折馳走になつた。

コックさんも何人か居て、シチュパンから流れて来る香料も忘れられない。そのコックさんは紅茶を『べにちや』と呼び、ビスケットも『ビスケ』と云つて居てオーブンで焼いて居た。又真浄寺のとなりに現存してる木造洋館もその頃の名残りで勝山くらぶと云ふのが三樹亭より少し早く岡村松槌と云ふ人が開業した。電灯のない洋食屋を想像して下さい、主な客は軍人さんで「士官さん」と呼ばれる将校級で、サーベルを腰にぶら下げて髯を貯えてるのが普通、服装はフランス型、帽子もフランス型で天井に星形の刺繍が施されて胸にはろく骨と普通呼ばれた飾りがある。乃木さんや山県さんの写真で見るあの格好です。その頃兵隊の将校連は北方から砂津までビールや美人に憧れて通つたらしい。宴会も度々行われ、その時には、ビール瓶の上に蠟燭を灯して、テーブルに並列され客の後に処々に立つてる女給さん達にボーイがサインすると卓上からビール瓶を膝の辺りで両脚で挟んでコルクの栓抜きで一斉にポンと音をさして抜く、幾本も抜いていると美しく結つた日本髪がゆれて、髷が動いてフラフラになりなんとも云えぬ風情がたゞよい、コーソツと士官さんたちは眼を細めて洋杯を傾けて居たと岡村のおばさんは云つて居た。酔ふた軍人達は「砂津名物ブラリの提灯犬が遠ぼえ吠えるだけ』と大声を上げてブラリ提灯ブラブラと北方へ引上げたそうだ。その川向ふの川岸に、乃木将軍の友人の三嶋熊太郎と云ふ人が早くも牛乳屋を営んで居て、今西鉄購買の入口の石垣が三嶋さんの家に上る石垣の名残りで其処に柳が道に枝を垂れて居たのを覚えてる、三嶋熊太郎さんの夫人は美しい人だつたが末の娘が生れて間もなく世を去られたのが、岡村の伯母さんが母の顔によく似てると云つて三嶋の娘さんは時折岡村の伯母さんを、おとずれたと度々話に聞いた。露西亜と戦争が初まると岡村の伯父さんは家族を残して軍の酒保として戦地に渡つた。

その頃の学童（船場、紺屋町附近の）は夏休には、今云ふアルバイトをやつて町々をふれ歩いた。『アーメは、よろし……白あめはよろし』と米飴の棒状のものを、お召の一反入の空箱に紐を付けて駅弁屋の様に首から吊して居た。又是に似た箱を二つか三つ重ねて肩に乗せて片手で是を押えて『すーしや、小鯛のすし』とふれて日暮近い街々を歩いて居た、絣や縞の筒袖の膝小僧の出る位の身丈のもの着て草履は「角じよーり」と呼ばれる角のある足半を履いて居た、小鯛の腹を開いて、卯の花すしをつめたもので一寸乙な味なものだつた。噛むとぱちつと音を立て、苧の実の割れる感触も楽しい思いではある。そん頃の夜詩折三樹亭の調理場の二階で何度か幻燈大会と西洋紙に書いて、道路に糊ではつたり、二階の子供部屋への階段の手摺を源平に白赤の布を巻付けて手伝つた、僕の得意顔を連想して戴きますだ。客馬車を借切つて、町内の婦子供は弁当を儲えて紫川の上流に遊びに行つたり徳力への螢狩りに出掛けた。帰りに馬車の床板が落ちて歩いて帰つたのも遠い昔の夢です。

編集後記

ひさしぶりで「記録」が出る。原稿は早くから集まつており、昨年中に刊行されるはずであつたのがこのように遅れたのは、ひとえに編集担当者である私の怠慢によるものである。諸方にひたすらにおわび申しあげるばかりである。

○

小倉の名刹として知られる広寿山福聚禅寺に所蔵されている蓮糸織の曼陀羅三幅と喜多元規筆の即非像ほか数点の画像が、美術文化財として福岡県から指定された。いずれも由緒ふかく、しかもすぐれた美術品である。

○

この指定を記念して、小倉市、市教育委員会、福聚禅寺などの共同主催による「黄檗美術展」が開催されることになつた。会期は五月三日から二十五日まで、会場は小倉城天守閣である。九州一円の黄檗宗寺院所蔵の書、画、什器を中心として、宇治の万福寺から長崎の崇福寺までにおよぶかなり規模の大きな美術展覧会である。本会としてもいろいろな面で応援したいと思つている。

○

昨夏、同人の浦橋七郎氏が急逝されたことは惜しいともなんともいいようがない。歌人として活躍される一方、本会のために尽力した功績は忘れがたい。残念の思いしきりである。

○

郷土研究というものは、一つのテーマを組織で取り組むもよし、各人が思い思いに勝手に研究をすすめるもよし、要はその成果をどのように地域文化に影響させるか、そして自己形成に役立たせるか、ということがたいせつだと考えるのである。

○

尨大な市史がぞくぞく刊行されている。「若松市史」「八幡市史」につづいて最近には「下関市史」の市政施行以後篇が出版された。「福岡県史」や「熊本県史」も印刷が進行中であるときく。いずれも地方史研究のいい資料である。

○

各地の郷土史会のうごきも依然として活発である。「郷土田川」「美夜古文化」「郷土戸畑」も続刊されているし、近くは下関郷土会が「郷土」という機関誌を出しはじめた。いずれも盟友たちの手に成る雑誌である。関門北九州の郷土研究はまさにはつらつとして、うれしいかぎりである。（R・K）

昭和三十六年三月二十日発行

編集　曽田共助
発行
印刷　佐藤修三
印刷所　小倉市黄金町三八〇　青巧社
発行所　小倉市堺町曽田方　小倉郷土会

小倉郷土史学　第三巻（原敬「記録」第7冊～9冊）

昭和57年5月20日　印刷
昭和57年5月25日　発行

揃定価 36,000円

著作権者との
申合せにより
検印省略

編者 小倉郷土会

発行者 佐藤今朝夫

制作・川越泰博

〒170 東京都豊島区巣鴨3－5－18
発行所 株式会社 国書刊行会
電話 (917)8287(代表) 振替・東京5－65209

落丁本・乱丁本はお取替いたします。印刷・セイユウ写真印刷㈱　製本・青木製本

(特価)
定価
¥5,400.-

小倉郷土会